

ザ・ストロベリー・バー

ぼくらの遊び場Roppongiで
アニキの世代は
こう遊んでいた

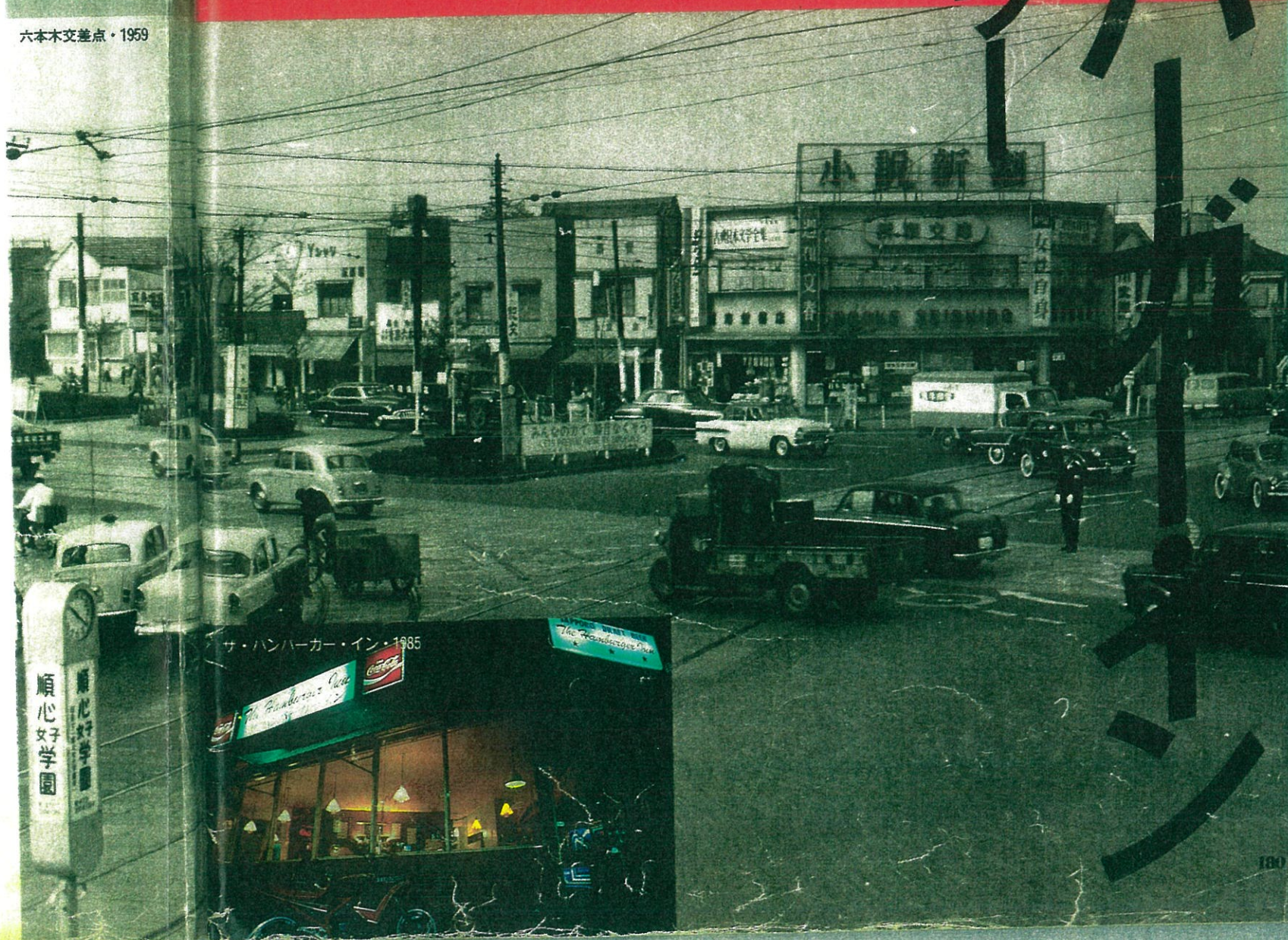
文・米山義男

交差点を東京タワーに向って150メートルほど。ロアビルの筋向いに、ひっそりと、しかし感じられる人には強烈なアメリカの匂いを発散しているハンバーガー・ショップがある。開店以来35年、ここは同じスタイルと味を守った。その個性に惹かれて、G1や芸能人・有名人、60年~70年代を駆け抜けたイキな遊び人たちが、この店のドアを開けた。

そして今、この店の窓越しに、ぼくらの遊び場Roppongiの20年をトリップしてみよう。その余りの変貌ぶりに、めまいしながら。



六本木交差点・1959



ザ・ハンバーガー・イン・1985

四角いハンバーガーを売る

「例の風営法なんかの影響で、最近デイスコが早く閉っちゃうんだ。それでウチにも地下鉄の始発まで時間つぶしをやるハイティーンの女の子の客が結構来るわけよ」

客の注文が一段落したある夜更け、(ザ・ハンバーガー・イン)の店主・天崎篤司はやや不機嫌そうな表情をガラス越しの街にときおり向けながら、オン・ザ・ロックスのグラスを口に運ぶ。

「なかにはカウンターに顔を埋めて眠っちゃうものもある。ウチはベッドハウスじゃないよ。って、必ず起しちゃうけど。そういうガキンチョに、オジサン、どうしてこの店は新しく改装しないの?」って聞かれて「あらんよ」。

「ザ・ハンバーガー・イン」だ。店名のロゴタイプを黒く抜いた白い蛍光灯の大きな看板が、ぼんやりした光を歩道に落している。

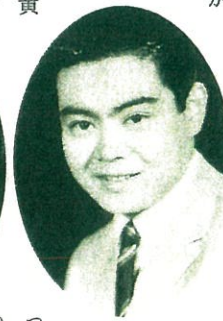
「まあ、笑って受け流しているけど、腹のなかじゃこう言っている。そのうのを大きなお世話というんだ、お嬢ちゃん。あんたらが気がつかないうちに床も天井も、ソファもスツールも何回も張り替えてあるの。前とそっくり同じにね」

赤と青をアクセントにした黄色のサンシェードと素通しガラスのウインドウからなるファサード。店の内部に同じく黄色のハイスツール、そして南カリフォルニアのヤシの並木道をアメ車が行き交うランプシェード、そしてジュークボックス……店のメニューにはサンドイッチ、ホットド



ガツカリしちゃうよ」

六本木交差点から東京タワー寄りに150メートルほど行った六本木5丁目の信号。その小さい交差点を渡った左角、くすんだ灰色の町山ビルという、古めかしい雑居ビルの1階が



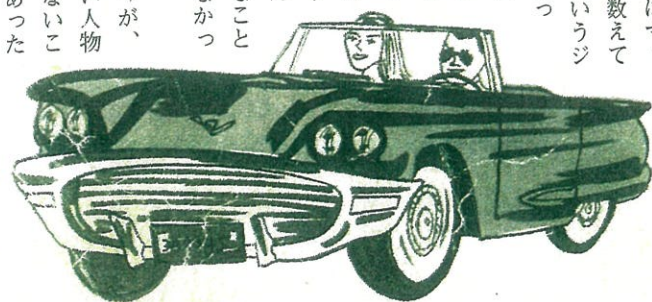
ツグの軽食類にコラ、ジ

ンジャーエール、ビール、ウイスキーなどが並んでいて、いちばん最初に(No.1 TOKYO ハンバーガー)とある。

「まあ、一番うまいかどうかは別として、ソノ、東京でもっとも古くからあるハンバーガーの店という意味があるんだ、これにはね」

天崎の説明によると、ザ・ハンバーガー・インの開店は1951年、34年前にさかのぼる。創業オーナーはむろん当時の中学生だった天崎本人ではなく、3歳連いの姉・厚子の夫だったジョン・S・ウェッ

ツスタインという人物。ウェッツスタインは72年に死亡し、その後を義弟の天崎が引き継いだのだが、メリーランド州出身のユダヤ系アメリカ人であるウェッツスタインが開いたハンバーガー・ショップは現在地ではなく、700メートルほど離れた飯倉片町(麻布台)のソ連大使館とアメリカンクラブに挟まれた一角にあった。

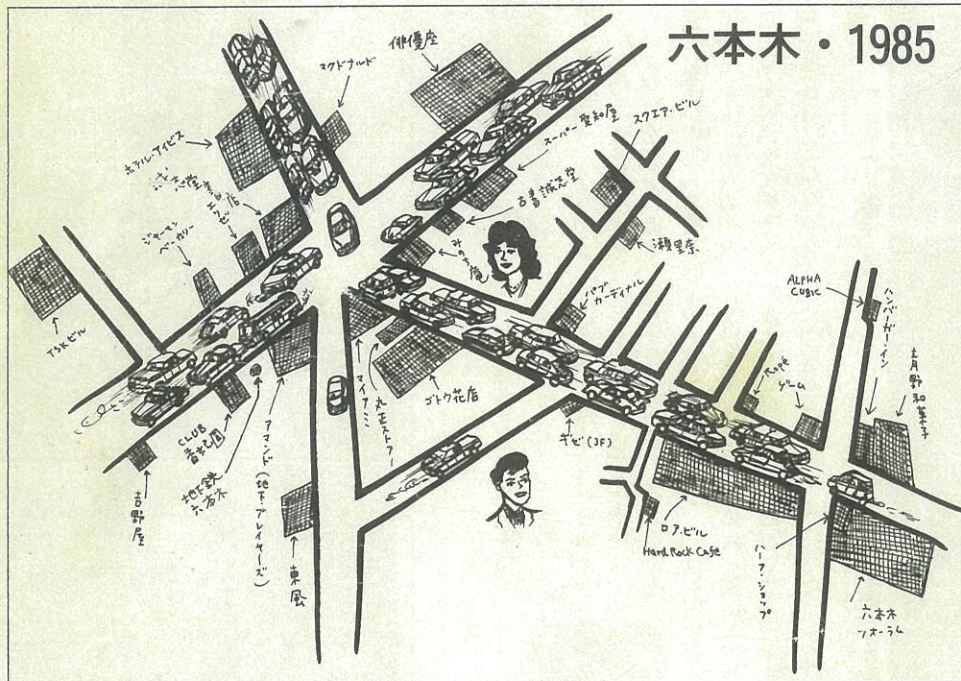


「ジョニーはGHQの元主計将校で、おれはマツカーサーの給料を数えてやってたんだ」というジョークがオハコだった。商売のセンスも優れていて、いまのこの店に移るときも工事中のうちに○月○日オープンなんていう看板を扉にかけたね、まだそんなことをやる店はそうなかったんだ」

と、天崎は言うが、そういう如才ない人物にも予測のつかないことがひとつだけあったらしい。

「なんと、その頃の東京にはハンバーガーの材料の肝腎の丸パンを焼いてくれるパン屋がなかったんだ。仕方がないから、耳を落とした食パンを代用してたんだね。だから形も四角だった。早い話、ホットサンドイッチだよ。で、最初の1年ぐらいはそんな状態で、それから進駐軍のPX(購買局)にパンを仕入れていた(ジャーマン・ベーカーリー)のドイツ人の社長に相談して麹町の工場で丸パンをつくってもらったっていうね。それがまあ、

4025-1861
 六本木・1965
 都電
 有楽町線
 六本木



その頃、天崎はまだ14歳の中学生。

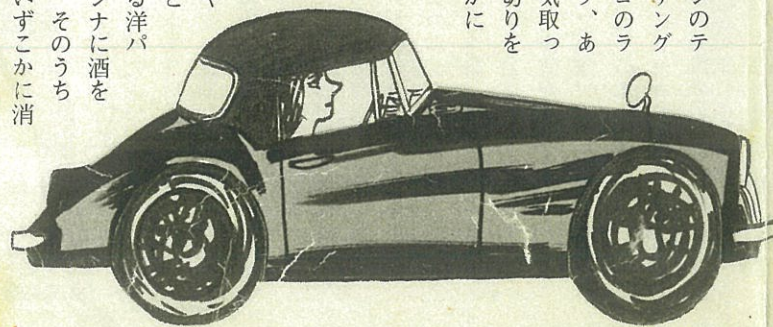
といへば六本木通りに渋谷・新橋間、外苑東通りに四谷三丁目と神谷町を結ぶ都電がトコトコ走っているだけ。そういう「陸の孤島」も同然の当時の六本木によくも悪くも活力を与えたのはアメリカ進駐軍である。現在防衛庁と東大生産技術研究所になっている場所がアメリカ陸軍第8騎兵師団（通称エイトキャーバリー）の駐留地となっていた。

六本木商店会の会長・後藤真によると、六本木の街並に目鼻がつきだしたのは50年頃か

カットにレーバンのテ
 イアドロップのサンゲ
 ラス、兵隊タバコのラ
 ッキーストライク、あ
 るいはちよつと氣取つ
 てキャメルの両切りを
 ふかしてね。なかに
 は早くからコー
 ナーのいい席を
 がっちりひとり



占めするやつもいたよ。そうすれば、オンナをピックアップしやすいから。外人と見ればケツを振る洋パンや目ばしいオンナに酒をおごってやって、そのうち肩を抱き合っていずこかに消えてくつて寸法。刹那的^{てい}ていやあ、まったくその通りで、ケンカも日常茶飯だった。みんな気が立つてたからね。兵隊だけじゃなく、各国の大使館関係者も来たけど、彼らはほとんど護身用のピストルを持ち歩いてたしね」



半徑150メートル以
内の旧六本木。
そのはずで64年から

九し
てもら
った四
角いハ
ンバーガ
ー

A photograph of a hamburger served on a white plate. The burger has a golden-brown bun, a thick, dark, breaded fried chicken patty, and some white sauce or cheese visible at the bottom. To the left of the burger are several golden-brown french fries. The background is a solid light green color.

「ひよつと
いたらね、

ウチより早く丸いハンバーガーを
こさえていた店が東京のどつかにあるかもしれないけどさ、ウチは《マクドナルド》より



A stylized illustration of a woman with dark hair in a high bun, wearing a red dress with a black bodice and a large red earring. She is gesturing with her right hand.



は絶対古いよ」

記憶の中で輝く店たち、湘南

とだ。

当時の東京は
敗戦の痛手にう
ちしおれ、六本



スコットランド気質。

時代、時代の風潮に「こびる」ことなく、18世紀の豊饒な味わいを今に伝えるスコットランドの正統スコッチ、サンディマック。封を切る。一杯目、潤い。二杯目、芳醇。三杯目、あまのい。四杯目、琥珀色の中に血筋のよさが見える。一日のヒロイドにふさわしい、飲むより味わうスコッチ、サンディマック。あの名門オールドバーの姉妹品。

「サンディマック」



Sandy Mac
Finest Blended Scotch Whisky

総代理店・オールドバー株式会社
標準的な小売価格 ¥6,000

「レオス・デリカテッセン」、(カフェ・デミタス)、(ザ・プレイヤーズ)、(シシリア)、(ニコラス)、(コスモポリタン)、(ガスライト)、(シマ)、(チャコ)……、ナイトクラブと呼ばれたこの店(ホステスはいないので、実態はスナック・バー)はもともG1向けに営業していたのだが、アメリカに憧れ、身も心もアメリカとながりたいという若者たちの倒錯的、かつ純真なエネルギーをその横文字看板のなかに吸い込んだのである。

陽が落ちて、ナイトクラブのネオンサインが刺激的な輝きに色づく、フォード、シボレーのコンバーチブル、トライアンフTR3、メイフラワー、MGのTD、TF、ルノー4CV、ワーゲンのデリバンなんやらといったクルマが、カラジオのFENを空中に撒き散らしながら外苑東通りにすべり込んでくる。クルーカットの男、ボニーテールの女の子などが横文字ネオンの店のなかに消えていき、夜8時頃から店内の興奮が六本木の夜を震わ

せる。外国煙草の煙が店内を覆い、ジュークボックスが50年代ポップミュージックを洪水させる。シルバ、マンボで汗を流し、酒と女で気分が乗ったところで、深夜のドライブが始まる。ル・マン方式のスタートで目差すはモチ横浜本牧、湘南だ。第一国道をぶつとばして茅ヶ崎パシフィックホテルあたりに繰り込むと、フィリピンバンド・スーナ

ーズが信じられない音を出していた。そのノリのスゴさにぶったまげているうちに、夜が明けた……。当時のそういう顔ぶれには福沢幸雄、三保敬太郎、式場壮吉、夏木陽介、ミッキー・カーチスなどがいたという。



六本木交差点より渋谷方面へ

交差点より溜池方面へ

交差点より防衛庁方面へ

交差点より麻布十番方面へ

天崎自身にとってもこの時代は青春のまつた中。19、21歳の彼は外車のハンドルを握りたい一心から、オーリスチンのバン、ワーゲンのバン、ジープを配送車にしていた「ジャーマン・ペーカー」で働いていた。ドドンパという不思議な4ビートのダンスが流行していた。「シマ」がその発祥地といわれ、六本木の株をあげていた。特に広いフロアがあったわけではなく、六本木のナイトクラブは

1965



屋、肉屋、薬局などの商店が低い家並をつくっている間に、ポツンポツンと点在していたにすぎない。しかもその多くは長いもので1、2年、短ければ半年で姿を消してしまった。20年後の現在なお営業を続けているのはアマンドの裏手地下にあるピアノ・バー(ザ・プレイヤーズ)、マイアミの地下のイタリアンレストラン「シシリア」、飯倉片町のバー「ガスライト」ぐらいしかない。しかし、短い命だっただけに当時を知る人たちの記憶のなかの劇場で、そういう店は別れた女のようにいつそう華やかに微笑んでいるようだ。

六本木族が消えてから

60年代が進むと、六本木は急速に変貌を始める。まず



が登場と同じく

のハイスピードで消えていった。その背景に、ひとつにはいつの時代にもおセカイな警察の取締りが効果をあげたことがある。特にジェリー・藤尾が「シマ」の店内で愚連隊に顔を切られる事件が文字通り痛く、度重なる手入れの前に営業停止に追い込まれる店が続出した。

もうひとつは、オリンピックである。世紀の祭典の準備に東京はあわてて化粧直しをする。ことになり、頭上も足元も姿を変えていく。61年に地下鉄日比谷線の工事が始まり、グ

夢の国の住人のような顔つきで踊る男と女であふれ返っていた。

「太陽族」が巷の話題を盛りあげ、それに呼応するように、58年暮、六本木の空を突き破る「巨大なベニス」東京タワーが登場。61年、戦後の復興のシンボルのその展望台にそわいの横縞のTシャツの男女が集まり、「野獣会」という勇ましい名のグループが結成された。

週刊誌、ラジオ、テレビが注目し、彼らは一躍時代のヒーローに駆けあがり、そこに目をつけた某大手芸能プロのプロデュースで彼らは日劇のウエスタンカーニバルのステージに躍り出て、そこから何人かは本格的に芸能人となっていた。

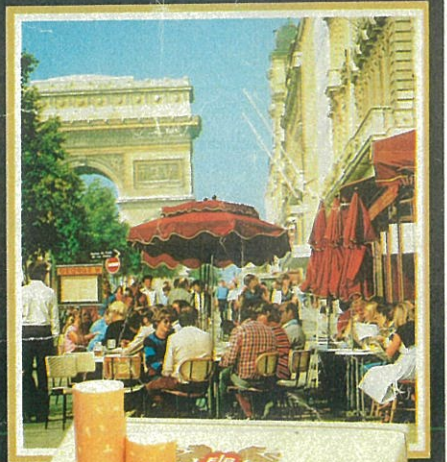
しかし、「野獣会」に集まる若者はすでに50年代の末期から六本木を根城にしていたし、

かまやつひろし10代の六本木

「ほくらが50年代から60年代の初めに通ったハンバーガー・インとかレオス、シマっていう店は、一歩足を踏み入れれば国境の向こう、完全なアメリカだった。ほくらはティーンエイジャーの頃からベニス回りをしていたんだけど、GEEの大型冷蔵庫、ハーシーの板チョコ、リクレーのチューインガム……なんかを覚えたら、もつとアメリカに接近したいと思うわけよ。六本木に行くのは、アメ横にリバイを買いに行くのと同じ感覚もあったね。ジーンズとか年上の人たちのファッションを盗むわけ。たとえばC&Wの寺本圭一さんなんか、テカロハット、ウエスタン・ブーツで馬にまたがって、六本木の交差点を渡ったりしちゃう。さっけエかっこいいわね。当時の六本木には、そういう感じのクリエーティブな意欲が渦巻いてたね」

「と、こう書いてくると、当時の六本木は熱狂の繁華街だったように思うかもしれないが、実はまったくそうではない。(六本木族)が溜り場になっていた店は、地元の八百屋、魚

ヨーロッパ エレガンス



Le Monde de Parisienne

軽さとうまさの
パリジェンヌ
エクストラ
20本入 260円
●トリプルフィルター●

本誌掲載のイラストは複製されています C.F.J. BURRUS INC. 1985

リーノベルトと六本のケヤキが撤去された。六本木を東西に貫く道路の上にもうひとつ高架線をつくる工事も始まった(首都高速3号線が開通するのは71年12月)。昼間は工事の騒音でたまにいいが、夜になるとつきり寂しくなったその頃の六本木にちよつとした話題をまいたのは、飯倉二丁目の角にできたイタリヤ料理店「キャンティ」は街はずれの暗闇のなか



に忽然と現われた(60年)。「あそこまで足を伸ばす客なんかいなかったから、な

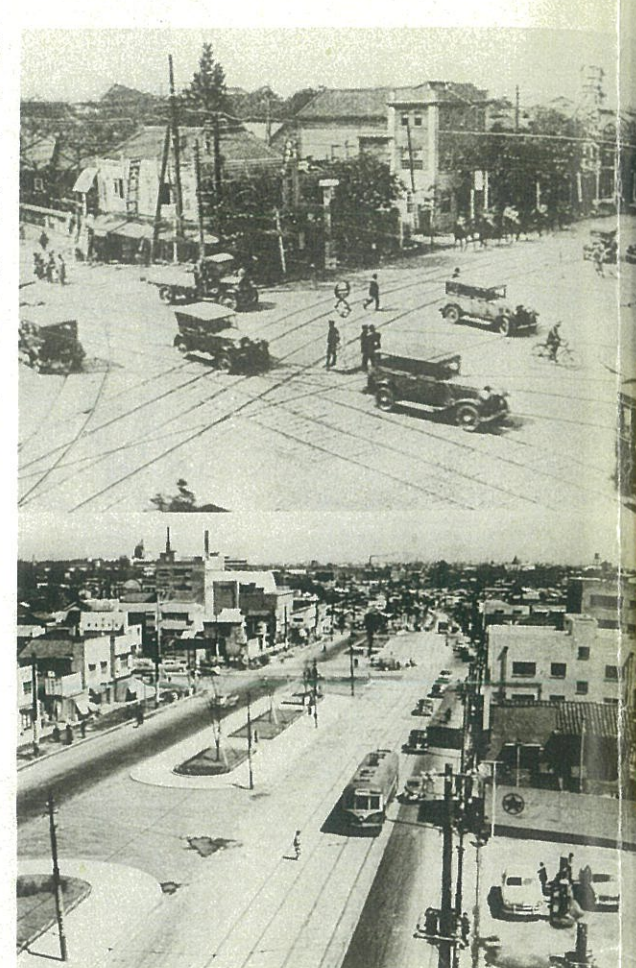
写真上は、昭和29年当時の俳優。戦後の焼け跡から、そろそろ整地が終わろうという頃。写真左は、昭和5年当時の六本木交差点。左下は昭和28年の溜池方向。中央のグリーンベルトは高速道路になり、都電は地下にもぐった。六本木が急速に変わり出す前の、貴重なスナップ

「前の店の後期の頃、プロレスの力道山がよく来てくれたよ。あの人はやつぱり並みの人じゃないね、ハンバーガーを1個、2個選んでいったんじゃ機嫌が悪いんだ。10個ばかりまとめてドーンと持つてくと、ニコッと笑ってアツという間にたいらげちゃった」

天崎によれば、それ以後、その驚くべき記録を破ったものはいない。

「60年代後半からこっち、だよね。六本木がただ喧しただけの街になってくるのはさ。オトナというか、自分で稼いだ金を持つて人間が少なくなつて、ガキばかり多くなつたもの」

天崎は顔じやうを苦々し



前の六本木の店舗はファッション関係と飲食店が50:50だったそう。それがいまではファッションは20に後退し、飲食が80と増大している。

「土地が高くなってきているから、飲食業じゃないとテナント料に追いつかない」後藤会長。

六本木交差点マイアミ前の路線価は240万(1平方メートル)で、新宿(東口タカノフルーッパラー前)625万、銀座(銀座4丁目鳩居堂前)615万には及ばないまでも、青山表参道(209万)を凌ぎ、赤坂見付(アマンド前)246万と肩を並べるまでになっている。

このため、飲食店の新陳代謝も激しく、「年間に4割の店が代替りしている」(後藤会長)。

こういう事情のなかで小さなハンバーガーショップが30年以上生き残っているのはほとんど奇蹟といつてもいい。

「ザ・ハンバーガー・イン」では、どこかで見たとある顔に遭遇すること多い。たとえば岩崎宏美、良美とマネージャーの姉との三人連れ、また早乙女愛、竹下景子がよくカ

に飲ませるビールはこれだ、つてミルクをカウスターにドンと置くと、今度は女の子がフロアで踊り出す。アタマきて、首根っこ押さえて店の外へ叩き出してやった。そういうことが2年間続いたね」

こういう話をしながら、突然、天崎はしみりした口調になる。

「それはまた、ベトナム戦争をドンパチャつ

てる頃で、帰休で日本にやつてきた兵隊がよくたつたひとりで店にきたよ。いや、別にケンカとかトラブルはなかった。オニオンをきかせたハンバーガーを3個ぐらいオカワリして、カントリリーの味と似てる」と言つて帰つてただけなんだよ……」

六本木は10年ほど前から、さらに様相を変えてきている。六本木商店会によると、10年

さて、時計の針が12時をまわつて、日付けが明日になるとザ・ハンバーガー・インのお客もだいたい顔ぶれが変わる。銀座から流れてきたハゲの紳士とそのパートナーの夜の職業婦人、銀色のスーツに黒のボウタイというお揃いの着た、休憩時間の腹ごしらえにやつてきた近くのクラブのバンドマンたちがカウンターに目立つ。ただ、表の通りのにぎわいはそう変化がない。

「移つてきた当時には、ウチも六本木のはずれだった。ここから東京タワーのほうは地元のお店があるだけで、ウチが人の流れの防波堤みたいだったから」

「60年代後半からこっち、だよね。六本木がただ喧しただけの街になってくるのはさ。オトナというか、自分で稼いだ金を持つて人間が少なくなつて、ガキばかり多くなつたもの」

天崎は顔じやうを苦々し



夫婦で読む、妊娠・出産、離乳の新しい生活実用誌。

ぱん

月刊誌 ピー・アムズ

創刊号発売中
●AB判●定価450円

創刊号の主な内容

妊娠がわかったとき、はるかかなたまで二本のレールが敷かれた感じがしました。 竹下景子

親が楽しく暮らしていれば子供もいい子に育つてあります。 所ジョージ

夫のページ 私は父親になったので「コレ」をやめました。

夫のページ 入浴法 お風呂に入れてくれるお父さんいつまでも好きです。

胎教クラブ/ペアレントング度チェック

小学館